



東京のレトロ建築を歩く

第 6 回

旧東京音楽学校奏楽堂

旧 東京音楽学校奏楽堂は、日本で最初の音楽学校として開校した東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）の校舎兼音楽ホールとして、明治23年（1890年）に建設された。

現在の建物は、老朽化により改修、移築されたもので、昭和62年（1987年）から公開されている。

建物の建築設計をしたのは、文部省の技師を務めていた建築家の山口半六と久留正道。2人はコンビで多くの文部省施設や官立学校の設計を担当した。

建物は、板張りの壁、瓦葺きの屋根にペディメント（三角状の部分）を備えた和洋折衷の外観を持つ。学校の校舎らしく華美な装飾は排されているが、ペディメント部分には、中央には雅楽で使われる火炎太鼓、左に西洋楽器のハープ、右に和楽器の笙が配置されたレリーフが設置されている。

このレリーフは、西洋の音楽を学びながら日本伝統の音楽も受け継ぎ、新しい音楽を発展させていこう、との気概を表わしているといわれている。

建物の2階には、日本最古の音楽ホールがある。柱なしで大空間を支えるために、梁を支える持送り（壁から突き出して梁などを支える部材）や、天井の間に張られた突っ張り棒などに工夫が凝らされている。

内部の構造として、天井は音の反響を



日本最古にして、現役の音楽ホール

DATA

名 称	旧東京音楽学校奏楽堂
所在地	東京都台東区上野公園8番43号
完 成	明治23年
設計者	山口 半六・久留 正道

を再利用している。

この音楽ホールの音響設計をしたのは、音楽理論家、物理学者として知られる上原六四郎といわれている。

音楽ホールのステージ上で目を引くのは、国内最古のパイプオルガン。パイプ総数1379本、いまでは世界でも残存しているものが少ない空気式アクション機構を持つ。このパイプオルガンは、大正9年（1920年）にイギリスから輸入され、昭和3年に奏楽堂へ寄贈されたものだ。100年を経ても当時と変わらない音色を響かせ、いまでも現役の東京芸術大学音楽学部の学生、院生によるパイプオルガンのコンサートが定期的に開催されている。

この建物は、昭和63年に国の重要文化財に指定された。

抑えるためにかまぼこ状に持ち上げられ、壁の四隅は音響のために曲線に設計されるなど、随所に音楽ホールとしての工夫が施されている。

壁面や床下には、吸音、遮音材として藁やおがくずが詰められている。



壁の中には遮音材として藁やおがくずが詰められている



音響にも配慮された、梁を支える持送り



中央に火炎太鼓、左にハーブ、右に笙が配置されたペディメント